

巻 頭 に 一 言

部長教授 杉 原 弘 人

青海千里洞の調査が始まったのは1965年8月である。それから3年、5回の調査をつづけ、遂に、1968年8月、最深部405mに達し、青海千里洞の全貌は明らかになった。ここに、この4年にわたる青海千里洞の調査結果を総合報告することになったことは誠に喜ばしいことである。

探検部の洞窟調査は1960年10月、滋賀県多賀町の河内風穴洞の調査に始まる。以来、1961年3月、岡山県新見市付近の字山洞、通り矢、井倉洞の調査、1962年11月、滋賀県醒ヶ井の洞窟調査、1963年1月、小倉市平尾台の洞窟調査、1964年3月、沖之永良部島鍾乳洞の調査、同年8月、三重県鷲嶺水穴、覆盆子洞の調査、1965年3月、岐阜県郡上八幡町の洞窟調査、1966年3月、岩手県安家洞、氷渡洞の調査、1967年3月、徳之島の洞窟調査、1968年3月、八重山群島の洞窟調査と日本各地の鍾乳洞地帯において活動してきた。

探検部の調査した岡山県新見市の井倉洞は、山口県の秋芳洞とならぶ中国地方の観光地としてその調査報告が役立っている。また、三重県の鷲嶺水穴、覆盆子洞は探検部の調査結果により、地元が天然記念物の申請をして、最近、指定されたという。このように探検部の調査は洞窟の開発、鍾乳洞の観光化に役立っている。特に、青海千里洞では堅穴の最深部到達の日本新記録を樹立した。このことは日本の洞穴学 (speleology) へのすぐれた貢献である。

洞窟調査は長年月の洞窟探検技術の錬磨と絶えざる装備の創意工夫が必要である。暗黒の神秘に閉ざされた洞窟ではさまざまな危険がみちている。少しでも精神の緊張をゆるめると、思いがけない、大きい事故が発生する。1960年、洞窟調査を始めて8年、探検部の事故のなかったことは調査に参加した部員の慎重な行動と不断の訓練の賜である。今後、探検部は日本のみならず、広く世界各地での洞窟調査に従事することも多いと思われるが、この青海千里洞での成果と8年の洞窟調査の経験を基礎として、更に大いなる活躍を期待する。

今回の調査には学内外の多数の方々より多大のご援助を賜りました。衷心より感謝の意を表します。特に青海町役場の渡辺紀一氏をはじめ関係各位、日本石灰石開発株式会社の井上栄雄氏をはじめ関係各位松下電器産業株式会社の山本幸雄氏、朝日新聞東京本社の藤田真一氏、服部有人氏、出原保彦氏、関西大学学生部学生課、関西大学教育後援会の各位に厚く御礼を申し上げます。